日本香港協会ニュース

JAPAN HONG KONG

飛龍 FLYING DRAGON

No.100

飛龍100号発行に寄せて

NPO法人日本香港協会会員　アグネス・チャン

日本香港協会の皆さま、飛龍100号の発行、誠におめでとうございます。日本と香港の架け橋として、貴重な役割を果たし続けてきたことに敬意を表します。

おかげさまで、私は今年、日本デビュー50周年を迎えることができました。『ひなげしの花』でデビューして、あっという間の半世紀でした。1月に東京で記念コンサートが行われ、ファンの皆さまと共に、この50年を振り返り、感動で胸がいっぱいになりました。何も知らなかった娘が香港からやってきて、日本の皆さまの応援、励まし、支持の元でここまで成長することができました。本当に心から感謝しています。

初めて来日した時、「アグネスは私がはじめて出会った香港人です」、「アグネスによって、香港が身近な場所になりました」とよく言われました。そういう言葉を聞くたびに、ちょっぴり責任を感じます。「香港人はいい人たち」、「香港はいいところ」と私を通して、感じていただけるよう、頑張らなければと思っていました。逆に香港に帰ると、「日本はどんなところ？」、「日本人は優しい？」など質問を受けます。そういう時は「日本に行ってみたい」、「日本人と友達になりたい」と香港の人たちが思えるように、日本のいいところを伝え続けてきました。きっと私のこの思いは『飛龍』読者の皆さまと同じだと思います。確かな情報を提供することで、より多くの日本の皆さまが香港に興味を持ってくださるように、日々頑張っておられることと思います。

日本と香港の友好関係が進展している近年、日本が大好きな香港人が増えています。年に何度も日本を訪れ、私よりも日本に詳しい友達さえいるくらいです。日本人の友達の中にも、香港通が何人もいます。仕事に、遊びに、気楽に香港へ行く方がとても多いです。思い、思われ、日本と香港は「相思相愛」な関係にあると私は思います。

残念ながら、コロナ禍の影響で簡単に香港と日本を行き来することができなくなりました。だからこそ、今は『飛龍』の役割が重要であると思います。直接現地に行かなくても、香港の魅力が感じられる誌面を作り、日本と香港の友好関係向上に貢献できるからです。

長年築き上げてきた日本と香港の友好関係が、時代の変化に左右されず、これからもフレンドリーであってほしいです。日本は香港にとって一番近い外国の一つ、香港は日本の一番身近な海外都市の一つです。経済面はもちろん、文化面においても、日本と香港の絆がより強くなるよう、私も自分なりに頑張っていきたいと思います。日本香港協会の皆さん、これからも力を合わせて、人々の心を繋ぐ赤い糸であり続けましょう。この度は本当におめでとうございます。

2022年5月 発行（禁無断転載）

目　次

飛龍100号発行に寄せて……1
これからの香港と日本とのつながり……2
飛龍創刊100号記念への祝賀メッセージ……3
表紙で振り返る100号のあゆみ……4
「香港日本人学校OBOG再交流の広場」（座談会）第6回……6
規格外を光らせる香港……8
香港のおうちごはんを日本の家庭でも……9
リアルとオンラインのいいとこどり―「Exhibition+」が始動……10
連合会・各協会便り
全　国：飛龍100号発行のお喜び
香港ビジネス協会世界連盟役員改選さる……11
東　京：第21回NPO法人日本香港協会総会
第17期CMMS「華人経営研究」講座は今年10月開講です……12
関　西：これからの香港への期待
2022年度総会開催……13
中　京：旅行会社から見た香港　その1……14
九　州：香港と共に歩む山九
香港特別行政区設立25周年記念春節昼食講演会2022開催……15
山　形：ベンジャミン・ヤウ香港貿易発展局日本首席代表の来県……16
北海道：「最北の酒蔵」が香港向けに日本酒新商品を披露……17
宮　城：学生部発足から2年 オンライン交流会好評継続中……18
沖　縄：春節・香港ビジネスセミナー2022 in 沖縄　開催
沖縄フェア in 香港　7月開催決定……19
広　島：香港での個別マーケティング事業について……20
新　潟：香港とお米輸出……21
高　知：駱駝式香港火鍋を開発……22

これからの香港と日本とのつながり

在香港日本国総領事（大使）　岡田 健一

この度、「飛龍」が創刊100号を迎えられることを心よりお慶び申し上げます。日本香港協会の機関誌として、協会の活動や日本・香港間の交流や香港情勢に関する情報を発信し、長きに亘り日本と香港のつながりの発展に大きく貢献されてきたことに対し、在香港日本国総領事館として心より謝意と敬意を表します。また、日本と香港の関係を支える「飛龍」の読者の皆様お一人お一人にも感謝申し上げます。節目となる刊において、お祝いの言葉を寄せる機会をいただき、誠にありがとうございます。

◆ 変わりゆく香港

昨今の香港ですが、2019年のデモ、2020年の国家安全維持法の施行、また、最近のオミクロン株感染拡大に伴う厳しい水際措置等、国際金融都市としての香港の評判を傷つけかねない事象が相次いで発生し、これらの影響を受け、これまで以上のスピードで政治・経済・社会面で香港は変化しています。

◆ 中国の影響拡大

特に政治面では中国の影響力が急速に強まっています。昨年春の中央政府主導の選挙制度改革を経て、昨年末に改革後初めての立法会議員選挙が行われました。「愛国者による香港統治」の原則が掲げられ、資格に合致しない者は全て排除され、建制派89名、非建制派はわずか１名という建制派圧勝の結果となりました。また、全国人民代表大会や全国・各省市政治協商会議の身分を持つ議員が全90名中35名存在し、中国本土を背景とする議員も10名以上いることから、今後は、立法会における中国の影響が拡大すると見込まれます。

また、報道分野においても、「リンゴ日報」や「立場新聞」等の民主派メディアが香港政府による厳しい統制により廃刊に追い込まれています。教育分野においても、昨年秋より中国国家の斉唱や国旗掲揚等を含む国家安全教育、更には抗日戦争教育が開始されています。

◆ 香港経済の強みは健在

他方、世界有数の国際金融センターとしての香港の地位、機能は基本的に維持されています。低率で簡素な税制や香港ドルと米ドルのリンク制は依然存在します。また、最近、英国政府の判断等により、2名の現職判事は辞任したものの、英豪加の最高裁判事経験者を含む残りの10名中9名の外国籍判事は香港の終審裁判所での判事職に留まる意向を示す等、司法の独立も維持されていると言えます。更には、香港に対する反外国制裁法の適用見送りや、香港証券取引所CEOの外国人登用等、香港には一定の裁量権があることを示す事例も存在し、香港の経済的な有用性・価値を重視する中央政府がこれらを棄損せぬよう慎重に対応していることが窺われます。

また、香港の経済指標も、対内直接投資額は世界第3位（2020）、IPO資金調達額は世界第4位（2021）、Z/Yen研究所（英）等の「世界金融センター指数」は第3位（2022年3月）、IMD国際経営開発研究所（スイス）のレポートでデジタル化や人材面では順位を上げるなど優れています。また、北部都市開発や大湾区経済開発といった発展の機会も存在し、後者については３月の全人代の政府活動報告でも、全国レベルの地域重要戦略として踏み込んで実施すると言及され、また、2022年度香港政府予算案でも投資拡充のための基金設立が表明されています。中国という一大市場を後背地に有し、中国と外との結節点を果たす香港の役割は、依然として他都市には代替できないものかと思います。

◆ 香港と日本のつながり

香港は我が国にとって緊密な経済関係及び人的交流を有する極めて重要なパートナーです。訪日旅行者数は2017年より3年連続でのべ220万人を上回っています。また、駐香港外国企業数は、2016年より中国企業を除けば日系企業が最多です。また、2021年は中国に次ぎ2位となりましたが、2020年まで連続して16年間、日本の農林水産物・食品の最大の輸出先です。

香港の街中では日本文化や日本製品が溢れています。当地日本関係団体が中心となり2016年から実施する「日本秋祭in香港」では、2021年、コロナ禍にも関わらず史上2位となる146ものイベントが実施され香港の人々にも喜んでいただきました。2022年も同イベントを通じ、日本と香港の交流をより一層推進します。

◆ 結び

香港は日々変化していますが、変わらない部分も多くあります。中でも、香港との交流は、両地域間に強固な信頼関係を構築し、あまねく分野に好影響を及ぼす等我が国にとって非常に重要なアセットとなっています。市民間の友好な関係は先人達の努力の結晶であり、我々は、そのアセットを守り発展させていく使命があります。協会の活動やその機関誌「飛龍」はその最も重要な部分の一つを担っていただいており、「飛龍」には、今後も日本と香港の交流の更なる発展に貢献いただくことを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

飛龍創刊100号記念への祝賀メッセージ

香港貿易発展局　総裁　マーガレット・フォン

日本香港協会機関誌『飛龍』100号の発行、誠におめでとうございます。香港貿易発展局を代表して心よりお祝い申し上げます。また、この場をお借りして、日頃より日本と香港間の経済・貿易交流のためにご尽力いただいている皆様からのお力添えと、香港貿易発展局事業への変わらぬご支援に対し、深く感謝申し上げます。『飛龍』におきましては、これまでも香港貿易発展局に関する記事を幾度となく取り上げていただきましたが、記念すべき100号に私自身が寄稿させていただく機会を与えていただき、大変光栄に存じております。

さて、昨今の国際経済は、大変難しい局面を迎えています。パンデミック（COVID-19）の世界的蔓延、世界規模の貿易摩擦、地域間競争の激化と保護貿易主義が同時に発生し、激しく吹き荒れる嵐のように、グローバル経済に大きな打撃を与えました。

しかしこのような時期にあっても、我々は常に好機を、特にアジアにおける事業機会を見据えています。「地域的包括的経済連携協定（RCEP）」や「広東・香港・澳門大湾区（GBA）発展計画」等の広域経済圏構想は、世界経済が国境を越えて連結性を高め、グローバル問題の解決や、国際ビジネスの拡大に対する飽くなき欲求が存在することを象徴しています。

パンデミック（COVID-19）はまた、国際間のビジネス協力の重要性を喚起しました。バイオテクノロジーをはじめコミュニケーションテクノロジーに至るまで、あらゆるビジネス主導のイノベーションは、人類史上かつてない形で、我々に新たな舵取りへと導いてくれました。また、国境を越えたパートナーシップも、気候変動等のグローバル危機を解決するための鍵となっています。

以上のような劇的な環境変化に鑑みますと、国際間のビジネス関係の構築と維持の重要性がこれまで以上に増しているといえます。香港と日本間のビジネスの絆は長い歴史の中で育まれてきました。とりわけ、グローバル経済の転換点であり、中国本土の経済を国際市場と連結するために香港が極めて重要な役割を果たしていた1980年代に、多くの日本企業は香港に進出しています。

グローバル経済の中心が西から東に移ろうとしている現在、香港はまさにグローバル経済の歴史の新たなページの入口に立ち、再び新たな役割を果たすべく発展しようとしています。香港貿易発展局は香港が生み出す数多くの事業機会を、日本のビジネスコミュニティーの皆様へ伝達、共有、推進していくために尽力して参ります。

2022年2月、私共は日本貿易振興機構（ジェトロ）と共催したオンラインセミナーにおきまして、いかにして日本企業が香港を活用し、GBA、中国本土、ASEAN各国におけるヘルスケア、サプライチェーンロジスティックス分野において、持続可能な新規ビジネスを展開することに成功したか、についての考えを共有しました。また昨年、香港貿易発展局が開催したオンライン／オフラインのイベントには、以前にも増して多くの日本企業・団体の方々からご参画いただき、皆様の香港プラットフォームに対する関心の高さが窺える結果となっております。『飛龍』の読者の皆様におかれましても、2022年度に開催される私共のイベントへのご参加を心よりお待ち申し上げております。

これからの時代は、日本香港協会の皆様からのお力添えがこれまでにも増して大切になると考えております。今後も我々のパートナーシップが末永く続いていくこと、また改めて『飛龍』に寄稿させていただく機会があることを、願っております。日本香港協会のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

第19回香港フォーラムにて、日本香港協会の各地協会代表者との集合写真（2018年12月）

飛龍

―表紙で振り返る100号のあゆみ―

飛龍は日本香港協会の創立の年、1988年に「日本香港協会ニュース」として創刊されました。第11号から「飛龍」名称を加えるよう変更されました。年3回発行して、香港とのビジネス情報、各協会のできごと、香港に関係する文化・芸能・食・観光情報などをお知らせしています。現在では全国11の協会会員、および関係経済団体等に配布しています。

1988-1996（第1～26号）

第1号（1988）

第5号（1989.深秋）

第6号（1990.03）

第9号（1991.01）

第10号（1991.04）

第14号（1992.04）

第19号（1993.07）

第22号（1994.04）

第26号（1996.秋）

1997-2005（第27～51号）

第27号（1997.春）

第28号（1997.09）

第32号（1999.08）

第33号（1999.10）

第38号（2001.04）

第42号（2002.11）

第46号（2004.03）

第48号（2004.12）

第50号（2005.07）

協会のできごと

- 1988 ● 日本香港協会設立
- 1988 ● 「日本香港協会ニュース」創刊
- 1990 ● 日本香港協会関西支部設立
- 1990 ● 日本香港協会中京支部設立
- 1991 ● 日本香港協会福岡支部設立
- 1991 ● 日本香港協会ニュースの名称を「飛龍」とする

香港の経済・制度

- 1990 ● 香港基本法布告
- 1990 ● 立法評議会初の直接選挙枠実施
- 1992 ● 最後の香港総督クリストファー・パッテン氏着任
- 1993 ● 香港金融管理局新設
- 1993 ● ミッドレベル・エスカレーター開通
- 1994 ● 中国銀行（香港）が香港ドルを発行
- 1996 ● 臨時立法会設立

協会のできごと

- 1998 ● ホームページ開設
- 1999 ● 日本香港協会山形支部設立
- 2000 ● 香港ビジネス協会世界連盟に加盟
- 2000 ● 第1回香港フォーラム参加（以後例年）
- 2002 ● 日本香港協会（東京）がNPO法人となる
- 2003 ● チャイニーズ・マネジメント＆マーケティング・スクールCMMS開始
- 2005 ● 日本香港協会北海道支部設立
- 2006 ● 第3回アジアフォーラム参加（以後例年）

香港の経済・制度

- 1997 ● 香港返還、初代行政長官に董建華氏就任
- 1998 ● 香港新空港開港
- 2003 ● SARS（重症急性呼吸器症候群）まん延
- 2003 ● CEPA（中国本土・香港経済貿易緊密化協定）
- 2005 ● 曾蔭権氏が第2代行政長官に就任

飛龍様式の変遷

1号～5号●A4判2色刷り ／ 6号●表紙がカラーに ／ 10号●題名が「飛龍」となる。「日本香港協会ニュース」の語も残る。／ 27～32号●B5判2色刷り ／ 33号●再びA4判となり以後継続。また表紙がカラー化

日本香港協会WEBサイト飛龍ページ
http://jhks.gr.jp/kouhou/index.html

2006-2014（第52～78号）

第52号（2006.04）

第56号（2007.08）

第57号（2007.12）

第59号（2008.08）

第67号（2011.04）

第69号（2011.12）

第71号（2012.08）

第76号（2014.04）

第77号（2014.08）

2015-2022（第79～100号）

第80号（2015.08）

第83号（2016.08）

第85号（2017.04）

第87号（2017.12）

第90号（2019.01）

第94号（2020.05）

第97号（2021.05）

第99号（2022.01）

第100号（2022.04）

協会のできごと

- 2006●日本香港協会宮城支部設立
- 2008●日本香港協会全国連合会発足
- 2008●支部は各地区の日本香港協会と変更
- 2008●東京および宮城協会で広東語教室開始
- 2008●沖縄日本香港協会設立
- 2009●福岡および北九州日本香港協会が合併し九州日本香港協会に変更
- 2010●広島日本香港協会設立
- 2013●新潟日本香港協会設立

香港の経済・制度

- 2007●深港西部通道（香港～深圳間海上橋高速道路、深圳側で一地両検）開通
- 2008●北京オリンピックの馬術競技を香港で開催
- 2012●梁振英氏が第3代行政長官に就任

協会のできごと

- 2016●高知日本香港協会設立
- 2017●山形日本香港協会再設立
- 2018●CMMS再開
- 2018●国際プロモーション「Think Global, Think Hong Kong」を機に林鄭月娥行政長官来日
- 2020●コロナ禍により理事会等のオンライン実施が増加

香港の経済・制度

- 2016●香港貿易発展局50周年
- 2016●香港の平均寿命が世界一に
- 2017●林鄭月娥氏が第4代行政長官に就任
- 2018●広深港高速鉄道香港まで開通（香港側一地両検始まる）
- 2018●港珠澳大橋開通
- 2019●「粤港澳大湾区」綱領発表
- 2021●屯門北連結路（海底トンネル）開通

「香港日本人学校OBOG再交流の広場」（座談会）第6回

ゲ　ス　ト：内藤昌史さん、本名賢一さん、山田徹さん、大橋志郎さん
司会／構成：伊東正裕（NPO法人日本香港協会 広報委員）
撮 影 協 力：田中コーポレーション「喜記（ヘイゲイ）」銀座店

本名さん、山田さん、大橋さん、内藤さん、伊東（右から）

――今回は、本企画初のリアル座談会になりますが、1970～71年と71～72年生まれ世代で、小・中学校時代を香港日本人学校で過ごした皆さんにお集まりいただきました。先ず、それぞれの自己紹介と香港との関わりについて伺います。

大橋　私は香港には都合3回住みました。1回目は71年に香港で生まれて小学6年まで。2回目はインターナショナルスクール（高1）の1年間。その後米国の高校と大学に進み、3回目は95年の大学卒業後で、父の貿易会社に入りました。とはいえ、私は香港で生まれたにも拘わらず、香港政庁に出生届を出していなかったので、記録上は「香港生まれ」ではないのです。香港の産婦人科病院で老医師が取り上げてくれたらしいのですが、父は日本領事館に出生届を提出していながら、香港政庁には出していませんでした。香港政庁にも届を出すため、後になって病院に行ったのですが、その医師は既に亡くなって閉院していたため、証明書を貰うことができなかったんです。

内藤　私は70年に日本で生まれて、半年後に香港に行きました。それからずっと香港で過ごし、中学3年までいました。ただ、幼稚園と小学校は現地校で、香港日本人学校には小学6年の2学期に転入しました。日本の高校に進学するには日本語の教育を受けた方がいいという理由からです。高校と大学は日本で卒業して、最初に就職したのは当時香港に本社があるヤオハンでした。香港との関わりを持ち続けたいと思ったからです。経理部に配属されましたが、4年後に経営破綻してしまったため、その後税理士の資格を取り、現在は税理士法人に勤めています。香港にも現地法人があるので、コロナ前は年に1回くらいは香港に行っていました。

本名　私は小学5年から中学3年までの5年間香港に住んでいましたが、その直前の5～9歳はオランダのロッテルダムにいました。父が東京銀行に勤めていたので、海外生活が長かったですね。高校進学で日本に帰国しましたが、高校から大学まで内藤さんとは一緒で、長い付き合いです。東京銀行は親子で勤めることが認められていなかったので、日本興業銀行に入り、英国駐在5年、米国に2年留学し、オーストラリア駐在を経て、先月まで再び5年間英国に駐在していました。やはり子供のころの海外生活の経験から、国際的な仕事に就きたいという希望が実現できて、うれしいですね。

山田　私は2歳の73年から香港に行き、最初は現地校Royden House School（ロイデン）の小学部に通っていました。ケネディロードに住んでいたので、家から近かったんです。英語はよくわからないし、算数はまだ足し算ができないのに、なぜか掛け算を先にやらされて困りました。学校にはインド人が大勢いましたが、算数教育はインド式だったのかも知れません。私が居残りをさせられて泣いていると、一緒に通っていた姉が迎えに来てくれたものです。香港日本人学校に移ったのは、小学1年生からです。ロイデンではインド人、中国人、韓国人が友達だったのですが、正直最初は日本人に馴染むのに苦労しました。日本人学校中学部を卒業後は日本の高校に進み、両親はその後も93年まで香港に住んでいたので、長期の休みにはよく香港に行っていました。

――本日お集まりの皆さんは、国際色豊かで、且つ香港との関係が「濃い」方ばかりですね。香港日本人学校の生活はどうでしたか。

内藤　現地校では、授業中の私語は厳禁でしたが、日本人学校は緩くて、おしゃべりもしていましたね。リトルリーグで野球をやったのは良い思い出です。

山田　日本人学校はロイデンに比べれば遊びに行く気分で楽しかったです。クラブ活動も週1回と無理のないものでしたので、柔道とバスケットボールをやり、週末はリトルリーグで野球を楽しみました。

大橋　当時は香港駐在の日本人がどんどん増えていた時代で、香港日本人学校もマンモス化していましたね。私もリトルリーグに入っていましたが、先輩・後輩の区別なくいろいろな人たちと交流できたのがよかったです。

本名　海外で同じ日本人学校に通った同級生との関係はやはり特別なものです。10年ぶり、20年ぶりに会っても当時と同じように話せますし、このような友達ができたことは大きな財産です。

――昔と今の香港を比べて何か違いはありますでしょうか。

山田　当時、日本人は「日本仔（ヤップンチャイ）」と呼ばれて、いじめの対象でしたが、今はそんなことはなくなりましたよね。

大橋　「日本仔」ならまだいい方で、時には「架仔（ガーチャイ）」といった差別用語で呼ばれたりもしました。あと、大きく変わったのは空港でしょうか。啓徳空港は懐かしい。到着出口が緩やかなスロープになっていて、

［香港日本人学校・同級生の座談会］

外に出た瞬間に、独特の臭いと湿気で「あ～ 香港に帰ってきた」と感じたものです。

本名　あそこは、今考えると小さな地方空港みたいでしたよね。私は九龍半島の何文田（ホーマンティン）に住んでいて、近くにあるちょっとした山から空港が見えました。飛行機が好きで、よく空港まで行っていました。

大橋　私も九龍の太子（プリンスエドワード）に住んでいたので、毎日、目の前を飛行機が飛んでいくのが見えました。

内藤　右に急旋回して滑走路に向かう「香港カーブ」のところですよね。

本名　香港の変化でやはり特徴的なのは中国化でしょうか。香港らしさはいつまでも失わないで欲しいと願っています。

伊東　実のところ、香港人は世界一実利的に生きている人たちだと思うんです。支配層が英国人であろうと、中国共産党であろうと、とにかく自分が儲かればいいという考えの人が多いのではないでしょうか。

本名　そもそも、植民地時代は英国から総督が派遣されてきて、参政権もなかったですからね。

山田　香港人は基本的にわがままなんです。繁華街である銅鑼湾（コーズウェイベイ）の人の流れと同じです。右も左もバラバラに歩くんだけどぶつからない。自分もわがままだけど人のわがままにも寛容ということでしょうか。一方、日本人は自分が我慢しているから、人のわがままを許さない傾向が強い。

内藤　同感ですね。日本にとって香港はある意味対極的な存在だと思います。年に何度も香港に行っていると変わったことがあまり分からない。久しぶりに行くと変化が分かるのですが。

大橋　ここ何年かで香港は大きく変わったように感じます。以前のように自由で寛大な場所ではなくなるとしたら、これからの香港に期待するのは難しいかも知れません。

本名　私が最近の香港に対して感じるのは、香港人らしさの喪失です。なんといいますか、昔のような逞しさが失われたような気がするんです。

――中国は香港の使い勝手の良さは分かっているので、私は香港の強みは残るのではと思っています。ところで皆さん、香港の食の思い出はいかがでしょうか。

山田　美味しかったのは、蒸しエビや大根餅、蒸し魚（石斑）などです。魚蛋（フィッシュボール）や、揚州炒飯、菜心も好きでした。飲茶はおばちゃんが目の前で焼く餃子や焼売の点心が最高でしたね。

内藤　私は屋台が好きでしたね。当時はもう日本人向けの学習塾があって、その帰りに友達と屋台で食べたカレー味のフィッシュボールが美味しかったです。サメの肉という噂もありましたが……（笑）。

本名　当時は怖いもの知らずで、衛生状態が良いとはいえない屋台のフィッシュボールを毎週のように食べていました。屋台を取り締まる警察が来ると、代金も受け取らずに猛スピードで逃げていくのを見るのはスリリングでしたね。

大橋　食のことを話せばキリがないくらい、たくさんの思い出がありますが、香港では、広東料理だけでなく、中国各地の料理を食べることができました。また、世界各国の料理のレストランもあって、国際色の豊かさを感じました。

――香港のようにグローバルな環境で育ったことの良い点とは何でしょうか。

内藤　やはり外国語が身についたことです。現地校に通っている時は、家では日本語、授業は英語、友達とは広東語と大変でしたが、そのような体験はなかなかできるものではありません。

山田　子供のころの国際的な経験があるので、大人になっても、どの国の人とでも分け隔てなく仲良くなれるということでしょうか。

大橋　異なる国の文化や歴史を敬う考え方が自然に身についたことは大きいですね。

山田　ただ、インターナショナルスクールに通うと、自己のアイデンティティーがなくなってしまうことが問題かもしれません。外国人は日本人に対して日本文化・日本的なものを期待するのに、僕にはそれがないわけです。

大橋　私も米国の高校で、まさにそれを指摘されました。「おまえは一体どこの人間なんだ？」と。でも香港で育って米国の高校に行ったので、日本のことを聞かれても、本当によく知らないんですよ。

本名　香港の同級生とよく話すのは「自分たちは日本人であって日本人ではない」ということです。日本人社会に溶け込みながらも、どこか日本人社会を客観視している自分がいる。

伊東　内藤さん、山田さん、大橋さんは、ほぼ香港人と言っても差し支えないと思います。

大橋　いや本名さんも、ずっと英国やオーストラリアなど外国暮らしが長いから日本人か？というと実は怪しい。そういう意味では、ここには純粋な日本人は誰もいないように思います（笑）。

伊東　話は尽きませんが、本日は楽しく、且つ刺激的な話を有難うございます。内向きといわれる日本人社会において、皆さんのような存在は貴重だと思います。今後もグローバルにますます活躍されることを期待しています。

香港日本人学校在籍時の内藤さん、大橋さん、山田さん、本名さん（左から）

規格外を光らせる香港

香港大学文学部日本研究科学科長　中野 嘉子

香港に来て、先月25年になった。

1997年4月、九龍の啓徳空港に降り立った時、香港にこれほど長く暮らすことになろうとは、夢にも思わなかった。その前、私はアメリカに10年ほどいて、首都ワシントンの大学院を出た。とにかくデキの悪い学生で、学者にも教師にも向かないと思い、しばらくテレビ・ドキュメンタリー番組の裏方をしていた。そこへアメリカ人女性の指導教官から、「台湾の大学で、1年の研究員の仕事があるから応募してみたら」とメールが届く。募集要項を読んでみると、台湾でなく香港城市大学で2年のポストだった。

香港返還直前のことで、歴史的な実験をこの目で見たい。そして、上司になる人は、アメリカ人で、異文化間のコミュニケーションの大家で、彼のもとで仕事もしてみたい。それでも2年経ったら、またアメリカに戻るつもりだった。心のどこかで、香港行きは都落ちだと思っていた。

ところが、それから2年のはずが25年。香港は居心地がよかった。アメリカでは、ネイティブ・スピーカーに囲まれて、英語を話す時どこか萎縮し、背の高い人たちに囲まれて、一生懸命背伸びをしていた。ところが香港の人たちは、バイリンガルは当たり前で、言葉を3つも4つもややブロークンに話す。それぞれ癖のある英語を、堂々と話しているのを見て、「あれ？背伸びしなくていいんだ」と肩の力が抜けた。

職場の上司にも恵まれた。最初のアメリカ人のボスは、私が着任するなり、「研究費の申請書を書きなさい。これまでの人生経験が生きる研究をすることです。学術分野を超えて構いません」とアドバイスをくれた。そんなに自由でいいのかと、私は目が丸くなった。彼の指導でどうやら研究企画書らしいものが書けるようになり、契約が終わる頃には、ある財団からフェローシップをいただいた。そこで1年間は次の仕事には就かずに、中国とアメリカで過ごすつもりでいた。

そこへ香港大学の日本研究科から、「ウチに来ませんか」と声をかけていただいた。日本研究科長は、日本人でも、香港人でもなく、デンマーク人の女性だった。私は研究室に伺い、その先1年間はフェローシップで、香港にいられないことを、ビクビクしながら伝えた。

すると彼女はメガネの向こうからグリーンの瞳でジッと見て、「あなたがフェローシップを持っていることは、香港大学にとって名誉なことです」という。そして、私が就職した1日目から休暇に入れるように、人事と交渉をしてくれた。

そしていよいよ教壇に立つのだが、私は日本研究を教えたことがない。するとデンマーク人のボスは、「あなたが得意なことを教えなさい」と背中を押してくれた。日本研究とは「こうあるべきだ」ではなく、「どうすれば、みんなのためになるか」という発想で学科が動いていた。

そこから「私に何ができるだろう？」と考えたのが、産学連携で作る体験学習だ。2013年に東京大学・園田茂人先生のご提案で、香港大―東大合同サマープログラムを始めた。両校の学生が合宿形式で「香港の中の日本」をテーマに考える。香港貿易発展局、在香港日本総領事館、香港日本人商工会議所にもお力添えをいただいた。一介の教師が、錚々たるリーダーを授業にお招きできたのも、香港社会の垣根の低さと、街のコンパクトなサイズがあってのことだと思う。

こうして25年、縁もゆかりもない香港で、私がどうにかやってこられたのは、この街の規格外なものも優しく包み込む、懐の深さがあってのことだ。日本と香港の違いを真珠に例えると、日本では、まんまるの珠がきれいに揃うと喜ばれるけれど、香港では尖ったり、へこんだりしたバロック真珠でも光ればいい。個性を光らせて、つないでいく、多様性への対応力が、香港のダイナミズムだと思う。

実はこの夏、香港を離れることになった。決して香港がイヤになったわけではなく、晴天の霹靂で、「日本に帰ってきませんか？」と声をかけていただいき、その気になってしまった。行き先は、東京理科大学の国際デザイン経営学科という。経営学部の新設学科だ。私は子供の頃から算数と理科がまるでダメなので、理科大と聞いて「どうして私？」と、狐につままれた感じだった。

ところがお話をうかがってみると、国際デザイン経営学科の教員には、デジタル周りの人だけでなく、デザイナーや、まちづくりの専門家もいる。学科の目標は、多様な分野の人をつなぐ、プロデューサーを育てることだという。なるほど、それはおもしろいし、香港での経験が活きてきそうだ。東京での仕事は、これまで香港で恩恵を受けてきた、多様性のダイナミズムを学生に伝えて、日本の固定観念から解き放つことだと思っている。

〈プロフィール〉
中野嘉子／香港大学文学部日本研究科学科長。令和３年度外務大臣表彰受賞。2013～18年に行われた香港大―東大合同サマープログラムの報告書は、こちら
http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/en/essays/post/ 20211115_GJS-02/

香港のおうちごはんを日本の家庭でも

香港料理＆食文化研究家　櫻井 景子

1989年に初めて香港を訪れて以来、香港の食の魅力に引き寄せられ早33年がたちました。初めて味わう香港の繊細で滋味深い広東料理の数々、海鮮料理、本場の點心、薬膳スープ、香港スイーツに心を奪われ、香港を訪れるたびに、より深く知りたいと思うようになりました。料理関連の仕事をしていた私に香港出張の話が来たのが1990年初頭。その出張の時に生まれて初めて香港のレストランの厨房に入りました。シェフが調理する姿はまるで魔法を見せられているかのようでした。丁寧に下準備された素材が中華鍋の中で一瞬にして美しく美味しい料理に変わるのです。「この料理を学びたい」そう心に強く想いが生まれ1996年に香港へ移住しました。

香港に移り住んですぐに香港料理専門学校へ入学し、5年ほどかけてさまざまな調理学校で香港料理を学びました。この体験は私の人生において特に素晴らしく、料理のみならず、香港の食文化や食習慣、そして何より香港人を理解するのに大きく役立ちました。

本稿では昨年出版した『香港のおうちごはん』について書籍になるまでの経緯を少し書きたいと思います。香港といえば「食の都」と言われますが、何度も訪れている人であっても香港の家庭料理を知る機会はそう多くはないと思います。香港グルメを紹介したガイドブックやネットの情報は数多くありますが、香港の家庭料理を食べたり、家庭料理に接する機会は非常に稀でしょう。私も香港に住み、香港で長く料理を勉強してきましたが、外食料理を学ぶことは出来ても、家庭料理を味わったり、学ぶ機会はなかなかありません。香港人の友人宅に招かれてはご馳走になる香港の家庭料理のおいしさに驚き、次第に家庭料理に興味が湧いてきたのです。

このように食べることも、学ぶことも出来ない家庭料理を日本人に伝えるにはどうしたらよいか？紆余曲折ありましたが、2001年、香港で初の日本人向け香港料理教室をオープンし、プロの香港人シェフや料理上手な香港人主婦から香港料理を直接学べる場所を作りました。また2006年から香港情報ポータルサイト「香港ナビ」で「香港レシピ」のページを担当させていただき、2007年からは香港の家庭を訪問して家庭料理を紹介する「香港ナビ版突撃！隣の晩ご飯」が始まりました。この企画はお陰様で大変好評となり、2009年まで合計9家族の家を訪問することが出来ました。この時に取材した内容をまとめて本にしてほしいと要望があり2018年にAmazon Kindleで電子書籍として出版しました。

その後、紙媒体の書籍として残したいと2018年から再び単独で香港人家庭を訪問、取材を始めました。しかし、翌2019年になると、香港でのデモが深刻になり、その後疫病の流行に伴い、世界中が混乱し始め、出版は自粛せざるをえなくなりました。

2020年10月の終わり、取材を受けてくださった1人のおばあさんが入院したとの連絡を受けました。「このまま状況が変わるのを待っていてはもう時間がない。自粛を続けていては手元に届けることが出来ない」と、いてもたってもいられない気持ちになりました。半年以内に製本化すべく、編集を進め、2021年2月クラウドファンディングに初挑戦し、多くの方のご支援を賜り無事同5月に出版することが出来ました。

新たに取材した11家族と、電子書籍の9家族、合計20家族の家庭の食事を記した日本では初めてのリアルな香港家庭料理本です。本の中では香港人の日常の食卓をそのまま記しています。外食では決して味わうことが出来ない香港家庭料理は、あっさりしており油っぽくなく、毎日でも食べられる健康的な料理、食べれば食べるほど元気になる料理です。美味しさだけではなく、長寿と健康を支え、家族や友人との絆と理解を深め、家族1人1人を思う愛情深い料理。それが香港の家庭料理です。その家庭料理に対する香港人の思いがこの本で伝わることを願っています。

この2年で香港と世界は大きく変わってしまいました。まだいつ香港に渡航できるのかさえ分かりません。この2年、香港が恋しくて、毎日家で香港ご飯を作って食べています。香港が恋しい日本のみなさまにも自宅で香港を感じていただけるよう、また更なる香港料理への深い理解の手助けに、この本がお役に立てば嬉しいです。

〈プロフィール〉　櫻井景子／1996年-2011年香港在住中に香港の料理専門学校にて本格的に広東料理を始め、中国地方料理を学ぶ。2001年より香港で香港料理教室ルシャスデリシャスをスタート。香港料理を日本に紹介する活動を続けている。

著者のホームページはこちら
https://lusdeli.wixsite.com/lusdeli

リアルとオンラインのいいとこどり―「Exhibition+」が始動

香港貿易発展局　マーケティング・マネージャー　引地 洋介

パンデミックによる各国・地域での渡航制限により、香港貿易発展局（以下HKTDC）の展示会も、その多くがオンライン開催となったり、香港現地のみリアル開催、海外からの参加はオンラインという、いわゆるハイブリッド形式での開催へと移行しています。コロナが収束した後も、リアルとオンラインのそれぞれ優れた部分を上手く融合した形の展示会が主流になっていくと予想されています。

◆ オンライン、ハイブリッド展示会

2020年から2021年にかけて、多くの展示会がオンライン開催への移行を余儀なくされました。コロナ禍で取引相手と直接会える機会が激減する中、既存の取引先との商談や新規顧客の開拓のできる場に対する出展者やバイヤーからの強い要望にお応えすべく、HKTDCでは定期的にオンライン展示会を開催しました。当初ほとんどの方がオンラインでの商談は未経験で、パソコン操作の方法が分からなかったりネット接続が不安定だったりといったオンラインならではのトラブルはあったものの、回を重ねるうちにコツを掴み、オンラインのメリットを上手く活用できるようになりました。実際に相手と対面で会うことができずサンプル製品の実物を直に見ることができないという側面もあり、業界によっては対応が難しい部分もありますが、初回の顔合わせやお互いの会社情報の交換など、オンラインで充分完結してしまう点も多々あり、活用すべきメリットは少なくないと言えます。

◆「Exhibition+」始動！

この度HKTDCの展示会では、リアル展示会でのブース出展を核として、オンライン展示会での成果を最大限に引き上げる商談ツール「Click2Match」とB2Bマーケットプレイス「hktdc.com Sourcing」という2つのオンラインサービスを融合した「Exhibition+」を導入しました。これにより、従来は3～7日間だったリアル展示会開催期間に加え、前後2か月の間、展示会をフル活用することができるようになります。展示会の前に露出を高めバイヤーにアピールしたい、また展示会後もしっかりとバイヤーをフォローすることで成約につなげたいといった元来からあった出展者のご要望に完全にお応えすることができるようになりました。

以下、2つのオンラインツールについてご紹介したいと思います。

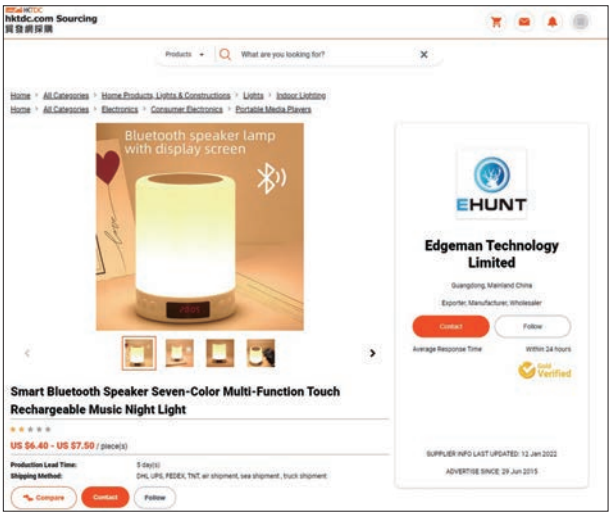
◆ Click2Match

Click2Match（クリック・トゥ・マッチ）は、インストール不要でインターネット環境さえあれば24時間どこにいても利用できるという便利さ、商談スケジュールの管理や、商談を希望する相手に商談リクエストを送れるといった機能のほか、出展者側からバイヤーを検索し連絡を取ることができるという、従来のリアル展示会にはなかった機能が画期的で大変好評をいただいています。

ワンクリックで簡単に使えるオンライン商談機能が付いていますので、Eメールなどで商談スケジュールのやり取りをして実際の商談はZOOMでといったことが不要になり、とても「使える」ツールになっています。

◆ hktdc.com Sourcing

年間を通じた総合的なPRを可能にするマーケットプレイス。20年以上の歴史をもちますが、2020年11月に全面大幅リニューアルしGoogleのAI（人工知能）を導入しました。アップロードした画像から検索されやすいキーワードのタグ付けをAIが自動的に行ってくれたり、アクセス解析によりバイヤーの国・地域別属性や製品別閲覧数のランキングが分かるなど、より効果的なマーケティング施策に活かすことができます。HKTDCのもつ広範かつ優良なバイヤーデータベースを主体として、アジア、北米、ヨーロッパの国々など世界中のユーザーから閲覧されています。



前述のとおり、今後はリアルとオンラインの優れた点を上手に組み合わせて自社製品・サービスを効果的にPRしていくことが必要になります。変化の激しく先々の見通しが立てにくい昨今のビジネス環境下、様々な新しいサービスが次々と生まれています。どのようなプラットフォームや方法が自社に適しているのか判断に迷った場合には、ぜひHKTDCの東京事務所若しくは大阪事務所までご相談ください。

日本香港協会全国連合会会長　佐藤 征洋

飛龍100号発行のお喜び

日本香港協会の機関誌「飛龍」の100号が発行された事は大変喜ばしいことであります。NPO法人日本香港協会、日本香港協会全国連合会を代表して心からお祝いを申し上げます。100号達成までの長い道には言うまでも無く編集委員、記事の投稿者、経済的支援者等大勢の関係者の献身的なご努力がありました。これまでに貢献された方々に心から感謝を申し上げます。

顧みると第1号は1988年即ち日本香港協会が東京に設立された年に「日本香港協会ニュース」として誕生しました。冒頭に協会会則の第1条“本会は香港との経済的、文化的交流を増進する”との文言が記され、この理念に沿った各地日本香港協会の活動や香港に関連する様々な情報がこの飛龍100号に至るまで広く盛り込まれております。飛龍は多種多様な記事、内容を包含する日本香港協会の貴重な機関誌となっています。

1990年に10号からは誌名を「飛龍」に変えて、その後も時の流れと共に鮮やかに情報を発信し続けました。植民地の時代が終わりを告げる1997年より以前の一時期は世間では一部不安も漂いました。しかし、飛龍誌上では香港政財界や日本の経済界の多くの方々が香港の社会、経済活動の将来に明るい予測をされ、実際にその通り1997年の歴史的な中国返還はスムーズに果たされ、香港は世界でも特筆される繁栄を実現して来ました。一方返還直後からアジア金融危機、2003年のサーズ、2008年のリーマンショック等、香港も激動の時代を過ごすこととなりました。しかし香港人は現実的で楽観的です。押し寄せる困難や激変を一国二制度の下見事に乗り切り、繰り返し襲う世界的激動の波を乗り越え、現在の繁栄の礎を築き続けました。

飛龍はこれらの時代を背景に香港協会の活動と共に立派な機関誌として成長しています。香港の経済、文化、社会生活まで広く生き生きとした話題を提供し、香港ゆかりの方々に愛されております。飛龍100号の文字を見ながら、これからも様々な香港の話題が飛龍に反映され、協会や一般の方々にも益々意義深い機関誌として愛され続けることを心から願っております。

日本香港協会全国連合会　事務局

香港ビジネス協会世界連盟役員改選さる

「香港ビジネス協会世界連盟（Federation of Hong Kong Business Associations Worldwide; 略称 FHKBAW）」は世界各国・地域に設立されている香港ビジネス協会を統括する組織で、現在、世界36ヶ国・地域に47のメンバー協会があり、総会員数は11,000名以上に上ります。本連盟組織は、世界各地協会をつなぐグローバルネットワークの構築・強化に加え、ビジネスチャンスの発掘を目的として、2000年11月に香港貿易発展局の支援のもと、発足しました。香港貿易発展局は、連盟メンバーである世界各地のビジネス協会を束ねる役割を果たしており、本部内に連盟事務局を設置しています。日本香港協会に入会されますと、自動的に連盟の会員としても登録されることになります。

連盟が年に一回主催する旗艦イベント「香港フォーラム」では、毎年約400名もの会員が世界中から香港に集結、相互交流を深めるほか、最新市場情報が入手できるさまざまなセッションに参画する機会を提供しています。昨年・一昨年はコロナ禍でオンライン開催となりましたが、多くの連盟メンバーは、渡航規制が緩和され、香港に行ける日を心待ちにしているのではないかと思われます。

昨年12月に開催されたオンライン方式の「香港フォーラム」では、三年に一度の連盟役員選挙が行われました。会長職は、アジア・太平洋、欧州、米州の三地域の代表から持ち回りで選出され、地域のバランスを考慮した役員構成となっています。2024年12月までが任期となる新役員は下記のとおりです。

■会　　長	Chairman, Mr. Hans Poulis（オランダ）
■副　会　長	Vice Chairman, Ms. Alexandria Sham（カナダ）
■名誉財務長	Honorary Treasurer, Mr. Dixon Chew（マレーシア）
■名誉幹事長	Honorary Secretary, Mr. Bernardo Mendia（ポルトガル）

最後に、連盟メンバーの特典について紹介させていただきたいと思います。連盟の会員登録サイトにアクセスして手続きをされますと、会員データベースからビジネス・コンタクトの閲覧が可能になります。同時に電子会員証が発行され、電子会員証の提示により、Design Galleryでの割引価格によるお買い物、厳選された香港、タイ、ベトナム等のファイブ・スターホテル、レストラン等での特別価格のご利用等の特典を受けることができますので、是非ご利用ください。特典の詳細はこちら：
https://www.hkfederation.org.hk/benefits

NPO法人日本香港協会　事務局長　福井 一

第21回NPO法人日本香港協会総会

3月12日、東京都千代田区一ツ橋の如水会館において、第21回通常総会が開催されました。今年は、新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置が解除されない状況下、人同士の接触を避けるため、会場参加者は必要最小限の理事のみとし、ハイブリッド方式にて行われました。

多くの正会員の皆様方からは委任状をご提出いただき、また11名の方々にはオンラインでのご参加を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。総会は、野島副会長による開会宣言の後、佐藤会長が議長を務め、令和3年度の事業報告及び決算報告（第一号・第二号議案）を事務局より行いました。続いて令和4年度の事業計画（第三号議案）について、広報委員会・文化交流委員会・学術スポーツ交流委員会の担当理事が発表しました。コロナ禍の影響で、過去2年に亘り社会活動が全般的に制限される中、各委員会がそれぞれ知恵を出し合い努力して参りましたが、広報委員会では機関誌「飛龍」100号を紙面増にて発刊、以降も新企画を打ち出す予定です。文化交流と学術スポーツ交流の両委員会は、それぞれ令和3年度より、コロナ禍という逆境を逆手にとり、東京地区だけではなく、日本全国、全世界に向けオンライン講座の拡充を図って参りました。令和4年度も引き続き、文化交流の広東語教室、学術スポーツ交流のCMMS（華人経営研究）講座については海外や地方にお住まいの方にも、等しく優良な講座をご提供すべく、講師を務めてくださる諸先生方にも相談しながら、講義内容を吟味しております。さらに、各委員会活動に伴う令和4年度活動予算（第四号議案）を事務局長より説明した後、第五号議案として一部役員の入れ替えを起案しました。全ての議案とも委任状による定足数を満たしており、異議無く承認されました。

来年の総会こそ、本来の姿である対面式で開催できればと願っておりますし、その際、正会員の皆様に恥じないご報告ができるよう、理事一同切磋琢磨して参る所存でございます。引き続きご支援の程、宜しくお願い致します。

NPO法人日本香港協会　理事　桜井 知治

第17期CMMS「華人経営研究」講座は今年10月開講です

昨年度は初めて全講座をオンライン化した結果、お陰様で海外含む全国各地から66名の応募を頂き、内14名は九州・関西・新潟各地の日本香港協会からの参加でした。厚く御礼申し上げます。今年度も来る10月より開講致しますので、各地の日本香港協会の会員の皆様には奮ってお申し込み頂きますようお願い申し上げます。

- 開催期間：2022年10月6日より2023年3月16日まで
  毎週木曜日
- 時間：19時～20時45分（日本時間）
- 形式：全講座オンライン（自宅または勤務先で受講可）
- 内容：理論編11講座、実践編10講座　全21講座
- 受講料：一般5万円、会員4万円
  分割受講可（3千円／講座、3講座以上）
  ＊理論編または実践編のみの受講も歓迎します
  （一般3万円、会員2万5千円）
- 募集人員：50名（先着順）

講義概要は次の通りです。

理論編：古代から現代まで思想文化と歴史を概観し、そこから派生した「国情」「中国思想」「戦術」「華人ネットワーク」の4つの分野を当代一流の講師陣が解説します。教授陣には新たに拓殖大学の朱炎教授をお迎えして、中国の歴史・社会・文化・政治の各方面から、中国人特有の関係、面子、人情の本質に迫ります。

実践編：理論編で得た知識を実践で生かせる講座です。「中国経済分析」「中国市場攻略」「中国企業分析」「香港コネクション」の4つの分野で経済界中心に活躍中の10名の講師が、現場での経験談を含め実践的な講義を行います。今年度は新しく4名の講師をお迎えしました。中国政府の強力な支援の下、デジタル化、AI、5G等を活用し、国内市場の充実と海外市場への影響力を強める中国経済、中国企業に対して、日系企業は、どうビジネスを展開、乃至は事業リスクをマネージしていくのか、CMMS講座は、その答えを提供いたします。

王効平教授（16期 第1回講義）

詳しくは「受講申込書」を含めて日本香港協会のHPの「チャイニーズ・マネジメント＆マーケティングスクール」に掲載中です。皆様、是非奮ってご応募ください。

関西日本香港協会　会長　戒田 真幸

これからの香港への期待

コロナ感染問題が発生してから2年が経過しました。全人類とウイルスの地球規模での戦いになっており、未だに収束の見通しが立っていません。香港は、中国とともに迅速に徹底した対応でコロナの感染拡大を抑え込み、昨年末頃まではコロナ感染者数がほぼゼロの状態でした。ところが、今年に入って、大阪府とおおよそ同じ人口740万人の香港において、オミクロン株派生型BA2の感染拡大が激増、3月14日～18日の1日当たりの感染者数が34,000～50,000人となっていると聞き、大変驚きました。仕事の関係で香港と連絡が取れなくなったため、香港貿易発展局の大阪事務所に照会したところ、香港社会全体が在宅勤務を強いられているとのことでした。これから先、香港や日本がどうなるのかが心配です。また、協会の会員の皆様とお会いする交流イベントが実施出来ない残念な状況が続いていますが、香港貿易発展局がオンラインでセミナーや展示会を開催することで、香港ビジネスをサポートしておられるのが頼もしいです。

最近、親しい会員の方から、早くコロナ問題が落ち着いて香港フォーラムに行きたいですね、と言われたり、オンライン香港フォーラムのヤング・エグゼクティブ・プログラムに参加した数名の若い人たちからは、香港での起業を検討したいと言われて、大変嬉しくなりました。

2020年6月、香港特別行政区国家安全維持法（香港国安法）が制定されてから、香港の将来を危惧する見方が広がっています。天安門事件追悼の民主化デモ、真の普通選挙を求めた雨傘運動、逃亡犯条例に反対した過激な反政府デモなどによる社会不安は、香港の対外的なイメージに大きなダメージを与えました。香港へ進出する中国企業が増加する一方、海外へ移住する香港人が増え、米中対立による香港ビジネスへの影響もみられます。大国である中国の特別行政区としての香港は、「一帯一路」のような中国の大きな政策を国際ビジネスのチャンスに転換するなど、前向きに対応しています。

私が香港で銀行に勤務していた1984年に中国への返還が合意されました。香港の著名な財界人に香港の将来に関する意見を求めたところ、「北京政府の最大の関心事は、イギリスが植民地香港からいくら儲けたかです。香港を金儲けし難いところにすることはないでしょう」との回答でした。政治が安定すれば、国際ビジネス・金融の拠点としての香港は中国へ返還後も順調に発展するとの意見です。私が日本に帰国して35年経ちましたが、香港の人口は100万人増加し、鄧小平による1978年に始まった改革開放以降の中国経済発展に伴って香港経済も大きく伸びました。1997年7月1日に「一国二制度」の中国への返還が実現しましたが、香港経済の特殊性を考え、安定した経済成長を実現するのに不可欠な外国為替の安定を目的に「為替ペッグ制、1米ドル＝7.8香港ドル」にしたのは賢明だったと思います。経済活動の自由度世界一の香港は優秀な人材が豊富です。「一国二制度」の下でも中国・アジアの発展と共に大きく発展することでしょう。

香港はPR上手ですね。私が香港に勤務していた時代から、長らくは「国際金融都市・アジアのビジネス拠点―香港」、中国からの来航者が激増した返還以降は「一大消費市場―香港、香港からアジアへ、そして世界へ」、直近では「中国の大湾区（GBA）と共に発展する香港」とその謳い文句を変えてきました。時代の変化を正しく理解し、且つ戦略的に迅速に行動を起こし、賢く将来に備えるのが香港人と言えるのではないでしょうか。

2月25日に開催された香港貿易発展局主催の香港春節ビジネスオンラインセミナーで、立地に恵まれ、航空貨物取扱量世界No.1の香港国際空港に、第3滑走路が本年度中に完工することが発表されました。大湾区の経済発展に備えて、貨物と旅行者双方の取扱の大幅増加とコストダウンを目指す大型プロジェクトで、さすが香港ですね。やることが戦略的で素早い。世界中から人が集まる香港、優れた商品とサービスで世界に出ていく日本、新しいビジネスチャンスが生まれる香港、国際的なネットワークでビジネス・マッチングに注力している香港貿易発展局、躍動する香港を舞台にして活動する香港ビジネス協会世界連盟の国際ネットワーク、同じ関心と好意を持ち合った多くの人達と親しく交流できる我々は恵まれています。今年も、明るく前向きに、皆さんと共に香港と日本の友好親善、香港のPRに努めていきましょう。

2022年度総会開催

関西日本香港協会では、2022年度総会を3月4日に大阪国際ビル16階のセミナー室で開催し、20名の会員・役員が参加しました。総会に先立って、コーヒーを飲みながら30分間の役員と会員の交流会が実施され、総会では、会計報告、予算案、事業報告、事業計画が承認され、16名の役員が今年も明るく、楽しく、前向きな協会運営に尽力することになりました。

総会

中京日本香港協会　副会長　福田 之保

旅行会社から見た香港　その1

古い話になりますが、私は1975年に名古屋の旅行会社に入社し、すぐに東京の虎ノ門支店に配属となりました。旅行会社の社員でありながら、始めは海外出張者との打ち合わせや、航空券手配などを契約している会社に出向いて仕事をしておりました。私の担当は、今はなきS金属工業㈱という大手鉄鋼会社でしたが、ほぼ毎日そちらへ伺い、出張関係の打ち合わせや航空券、ホテルの手配などをしておりました。

当時不思議に思っていたのは、日本から外貨の持ち出し限度が、500米ドルで、それ以上持ち出すには、日本橋の日本銀行へ行って、パスポートに裏書許可をもらわなければ、両替もできませんでした。日本の外貨準備高が少ない時期であったための措置だったと後になってわかりました。また、為替レートも固定相場制で、スミソニアンレート1米ドルが308円の時代でした。

今とは違い、海外出張は大変な出費になるため、皆大金をもって出かけて行ったものでした。さらに、当時は、種痘やコレラの予防接種も必要で、アフリカへの渡航は、さらに黄熱病の予防接種もありましたので、人によっては予防接種だらけで、体の中にはいろんなワクチンが混合されていたことでしょう。

私は、幾度となく日本銀行へ許可をもらいに行ったり、ビザを取るために東京中の各国大使館をかけずり回っていました。アメリカやヨーロッパ、オーストラリア、南米、さらには、サウジアラビア、イラクなどの中東の国のビザも取りに行ったものです。中東の大使館の場合、金曜が休み（イスラム教）で予定が組みにくかったこと、緊急なビザ発給に際しては、商社経由で現地取引先からテレックスを打ってもらったことなどが思い出されます。

今でこそ日本のパスポートは、世界最強クラスとなり、シンガポールと同率1位で世界192か国・地域にビザなしで渡航が可能になっております。しかし当時は、海外旅行をするには、ましてや観光旅行をするにはまだまだ大変な時代でした。昭和50年代になると、旅行業界にも目まぐるしい変化が訪れます。ジャルパックをはじめとした観光目的のパッケージツアーが出て、ハワイやヨーロッパなどへ行かれる方も増えてきました。

入社して3年目、4月1日付で観光旅行課に異動となり、観光旅行の手配のほか、自らが添乗員として海外へも行けるという機会をいただきました。新規顧客開拓担当として、東京都内エリアを担当、1日15軒回るという目標を掲げ、来る日も来る日も飛び込みセールスが続きました。とりわけ、海外を渡航先とした法人の視察旅行をターゲットに定め、各種業界の勉強・研究をしました。中でも、①医療分野（N病院会や歯科学会のヨーロッパ研修ツアー）、②建設分野（建設技術協会のヨーロッパ、アメリカツアー）③洋菓子店（ヨーロッパ視察ツアー）などは、飛び込み営業による私の成果でした。全国規模の洋菓子店の若手の研修ツアーは、毎年のように手掛けましたが、当時の日本のケーキは、まだまだヨーロッパから学ぶべきものが多く、パリやベルギー、スイス、オーストリアの名門の洋菓子店をめぐりましたが、少しは日本の若手パティシエ育成に貢献できたのではないかと自負しております。

1982年以降、私は、新設の有楽町支店へ転勤となり、そこで香港との接点が生まれました。当時の有楽町支店は、銀座2丁目にあり、総勢たった10名で新規顧客の開拓に努めました。

旅行会社の仕事は、渡航先で分けると国内旅行と海外旅行、種別にすると、出張（業務）旅行と、観光旅行に分けられます。割合的には、業務20%、観光80%くらいでしょうか。時の観光旅行の形態は、団体旅行が主体でした。当時まだ主任だった私は、団体を対象とした観光旅行で企業とのタイアップ企画を支店長に進言、検討の結果、一番手ごろな香港旅行を売ろうと決め、「GO！GO！ 魅惑の香港4日間」と銘打った企画書を携えて、都内各所へ飛び込み販売に回りました。香港は、私の2度目の海外旅行先だったということもあり、事情もよくわかっていましたし、男女ともが楽しめる渡航先で、日本人はビザ取得も必要ありませんでした。ツアーとしては、半日観光が組みやすく、ショッピングも楽しめ、また夜景のすばらしさも魅力的だったので、売れる企画だろうという自信がありました。

以上、長々と私の職歴をお話ししましたが、これ以降は、次回に掲載させていただきます。

市街地にあった啓徳空港到着ロビー
（写真：日本香港協会（東京）広報委員会）

九州日本香港協会　副会長　山本 博章（山九株式会社福岡支店長）

香港と共に歩む山九

◆ 山九東源のあゆみ

小説「香港の水」で知られる1960～70年代の人口爆発的増加と水不足で悩む香港。この解決に向け、香港政府が計画する淡水化プロジェクトの輸送を受注したことで、1973年山九東源国際（香港）有限公司が設立されました。以降、南海石油開発関連資材輸送（艀回漕による石油開発基地である赤湾、湛江向け）や沙角発電所向けプラント輸送などプラント事業を中心に香港と中国を繋ぐ役割を担ってきました。中国大陸への外資参入が始まる80年代以降は、山九の基幹事業であるプラント・エンジニアリング、ロジスティクス・ソリューション、ビジネス・ソリューションの3事業で中国大陸に拠点を広げ、現在11現地法人、56倉庫拠点（50万㎡）に至ります。近年では、長寿世界一である香港の高齢化時代に向けた、がん治療設備の設置や香港空港のターミナル間移動列車の搬入なども行っております。

◆ ATL物流センター機能

当物流センターは24時間運営で、中国大陸－香港間のダブルライセンス車両と香港内循環車両を連動させ、最短で航空貨物、海上貨物を輸出入することができる集積基地となっています。庫内全域にメザニンフロアを有し、明確な人車分離を行うことで、安全且つスピーディーなピッキング、アソート、再梱包作業を実施しております。ビジネスモデルとしては、①バイヤーズコンソリ（100社前後のサプライヤー貨物の集約輸出）、②山九海上混載サービス（日本各港）、③香港－中国大陸工場間24時間定時トラック運行、④クロスドックサービス（日本、中国大陸から香港経由で世界60カ国へ輸送、⑤アフリカ物流（デジタル通貨決済可）などがございます。

また、弊社は合弁企業形態をとっており、パートナーの物流センターを拠点とし、3温度帯貨物（食品、酒類、医薬品）の保管・配送、Eコマース関連のB to C物流にも取り組んでおります。

◆ 香港に求められる物流とその実現

粤港澳大湾区発展計画における物流施策では、インフラの相互接続により海運（港湾インフラ強化）、空運（香港空港第三滑走路建設）、陸運（大湾区主要都市を1時間で繋ぐ）における香港－中国大陸の一体化が、更に一帯一路建設に向けた協力として、香港・マカオ・中国大陸との市場の一体化（ヒト、モノ、カネ）が推進されています。

土地価格、人件費の継続高騰を避けることができない香港において、山九は3PL（3rd Party Logistics）業者として、BPO（Business Process Outsourcing）やお客様契約倉庫の作業請負に取り組んでおります。山九のビジネスモデルの一つであるビジネス・ソリューション（作業請負）では、お客様が抱える固定コストを物流診断により変動費化させ、また計画的な作業改善と効率化推進で発生コストの圧縮を図り、お客様のBCP（Business Continuity Plan）に貢献していきたいと考えております。

◆ 九州と香港のご縁が深まるように

門司発祥の山九にとって、九州と香港のご縁がより一層深まり、香港ビジネスが活気づくことを期待しております。九州との関連物流では工業品以外に食品や酒類の輸送にも力を注いでおります。ご存じの通り、香港は日本物品が求められる巨大市場であり、この勢いが華南エリアへと広がっていく傾向にあります。山九は華南エリアにおいて日系小売りメーカー様、日用品メーカー様の物流センター（3温度帯）及び全域の配送業務を行っており、今後は大湾区規模での購買力拡大に期待しつつ、サービス拡大に努めて参ります。

山九東源国際（香港）有限公司
ATL物流センター

九州日本香港協会インターン　古川　夏実（福岡女学院大学2年）

香港特別行政区設立25周年記念 春節昼食講演会2022開催

香港返還25周年を記念し、3月17日に春節昼食講演会をグランドハイアット福岡にて開催しました。今回の講演会は九州日本香港協会、香港貿易発展局主催で行われました。冒頭に九州日本香港協会会長石原進による開会挨拶、香港貿易発展局日本首席代表ベンジャミン・ヤウ氏にご挨拶いただいた後、講演会に入りました。まずはじめに味珍味（香港）有限公司会長フランキー・ウー氏に「香港における日本食ビジネスの未来と九州の可能性」というテーマで香港市場における日本産農作物の重要性についてご講演いただきました。続いて香港貿易発展局大阪事務所長リッキー・フォン氏に「香港・GBA（大湾区）の今を知る」をテーマに香港マーケットの現状とGBA（大湾区）など今後の新たなビジネス・チャンスについてご講演いただきました。今回の講演会では100名もの方々に参加していただき、会場は大いに盛り上がりました。今回の講演会を機に香港と九州の関係がさらに強まることを祈念いたします。

山形日本香港協会　会長　大沼 みずほ

ベンジャミン・ヤウ香港貿易発展局日本首席代表の来県

2022年3月3日、4日と2日間、まだ雪の残る山形県にベンジャミン・ヤウ香港貿易発展局日本首席代表が来られ、私も2日間、同行した。ヤウ首席代表は、県庁、県酒造組合、米沢市、酒蔵、山形新聞社などを精力的に訪問し、今後の山形県と香港の交流強化に向け、政財界の方々と実のある意見交換ができた。特に昨年の東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンであった米沢市での歓迎ぶりは大きく、ホストタウンをきっかけに香港の商社などがすでに米沢市で動き出しており、今後はビジネス面においても進展のきざしがある。

1. 香港のホストタウン・米沢

全国1,700ある自治体の中で、東京オリンピック・パラリンピックの香港のホストタウンは米沢市含めて全国で3か所だが、香港チームにとって、金メダルを取ったフェンシングチームのホストタウンであり、中高生とフェンシングを通じた交流をしてきた米沢市への思いはきっと別格であろう。開催中は、多くの米沢市民が日本選手のみならず香港のフェンシング選手を応援していた。現在では、香港への山形県産品の輸出を促進するため、香港の商社が山形県で法人登記をし、ビジネスを始めようとしているとの話を中川勝市長より伺った。ホストタウンから始まったスポーツ交流が青少年交流、そしてビジネス交流へと進化していることは喜ばしく、今後、米沢市を中心とした置賜地域において、香港との経済、観光、教育、文化の面での交流がさらに活発になることを期待したい。

2. 日本酒をはじめとする輸出促進

山形県は農業県であり、近年香港への輸出は増加傾向にある。特に日本酒は出羽桜、東光などが先陣を切っており、香港のシティスーパーやイオンでも多くの種類を目にすることができる。今回、県酒造組合の仲野益美会長ならびに米沢市の酒蔵「小嶋総本店」(東光) を訪ね、今後の輸出に向けた話を伺うことができた。ヤウ首席代表は特に小嶋総本店における今後の気候変動をはじめとするSDGsの取り組みに高い関心を示し、「地球にやさしいお酒づくり」というのはとても香港の人たちに響くとの認識を持たれた。日本酒つくりには大量のエネルギーを使う。だからこそ、地産地消でエネルギーを確保し、廃棄物処理に対しても真摯に向き合う姿勢はこれからの日本の酒造りにおいても大事な視点であろう。

3. 米沢牛は米沢市で

香港では、「和牛」も大変人気であるが、米沢牛は肥育が32か月と長いため、香港向けに輸出ができない状況にある。これまでも、中国政府に働きかけをしてきたところであるが、そのハードルは極めて高い。また、頭数が少ないこともまた輸出を難しくしている。今回、米沢市の観光名所でもある上杉伯爵邸にて、米沢牛を食したあと、サラミなどの加工品を香港向けに輸出している食肉公社に伺った。そこでは、いかに米沢牛が希少であるか、32か月という時間をかけることでうまみが凝縮されていくといった話を聞くことができた。ヤウ首席代表は、「山形牛は香港でもだんだん知名度が上がってきている。米沢でしか食べることのできない米沢牛はむしろ輸出向けに頑張るのではなく、観光面で、ここでしか食べることのできない和牛として人々を誘致することに力点を置くべきではないか」と話していた。米沢を初めて訪れたヤウ首席代表自身が大いなる米沢牛の宣伝者となってくれることを期待したい。

4. パッケージとしての戦略

今回、ヤウ首席代表が山形県を訪れることで、山形県の雪深さ、温泉の多さ、豊かな食文化に触れ、今後の交流の進展に大いなる可能性を見出してくれたことは大変にありがたいことだった。特に大事な視点が「パッケージとしての戦略」である。おいしい酒、温泉、スキーといったそれぞれが単体として発信はされているが、パッケージ化されていないのである。例えば、「東光」や「出羽桜」を知っている香港人は米沢を知っているかと言えば知らないといった具合である。これらをパッケージとして売り出す戦略が今後求められている。県境を越えて、米沢市を起点に会津若松に日帰りツアーを組んでもいいかもしれない。県の枠を超え、柔軟な発想で、今後さらに米沢を中心に、山形県と香港との交流を太く、そして芯のあるものにしていきたい。

ヤウ首席代表、中川米沢市長、筆者

北海道日本香港協会　事務局

「最北の酒蔵」が香港向けに日本酒新商品を披露
～北海道企業と香港企業との新たなコラボレーション誕生～

本協会の新規法人会員である国稀酒造株式会社（以下、国稀酒造）の取組について紹介させていただきます。

国稀酒造は、3月7日に東京・日比谷松本楼にて香港向け新商品三種の発表会を開催し、NPO法人日本香港協会（東京）の会員企業である酒類バイヤーとの商談会も併せて執り行いました。国稀酒造からは社長、副社長、社長室長が、日本香港協会全国連合会からは会長、また、日本香港協会（東京）からも副会長をはじめ広報担当理事、ビジネス交流担当理事および事務局長、ゲストとしてジェトロの農林水産・食品部長、香港貿易発展局日本首席代表、香港日本料理店協会名誉会長らが列席しました。本イベントは北海道と東京の地域を跨ぐ協会間の協力イベントとして新たな取組みとなりました。

主催者と来賓

国稀酒造は明治15年（1882年）の創業で、日本最北端の酒蔵として知られています。四代目の林眞二代表取締役社長は、国稀の味わいと増毛町の魅力をさらに輝かせたいという想いから、今回、香港向けに三種（純米大吟醸酒、スパークリング清酒、梅酒）のお酒を開発し、満を持して本イベントに臨みました。とりわけ、今回の商品は国稀酒造と香港企業でパッケージデザインを担当したReally Design社によるコラボレーションから生まれたものでもあることから、当日、会場には、日本香港協会関係者および香港市場向けに酒類を取扱う数々の有力バイヤーに加え、在日本香港人インフルエンサーなども招待されました。日本香港協会全国連合会およびNPO法人日本香港協会（東京）の佐藤会長は開会挨拶に際し、日本香港協会として、地域を跨ぐ協会間の協力の下で本イベントが実現できたことを祝し、また、香港貿易発展局のベンジャミン・ヤウ日本首席代表は乾杯のご発声をし、日本のお酒を通じて、日本・香港間の貿易振興につながるこの新たなプロジェクトの取組みを歓迎しました。

2021年の日本から香港向けの酒類の輸出実績は93億円（前年比50%増）となっており、中国、アメリカに

国稀酒造の方々と日本香港協会メンバー

次いで世界第三位でした。中でも単価が高い地酒やウィスキーが主体で、1リットル当たりの単価は2870円であり、マカオに次いで世界2位です。コロナ前の2019年は香港から日本への訪問客数が229万人を上回り、人口の3人に1人が訪日するという日本びいきの香港人ではありますが、日本料理好き、日本の食材に対する造詣の深さにも驚かされます。日本のお酒も例外ではなく、香港では富裕層のみならず若い人々や女性からも好まれており、最近は家庭で日本酒で晩酌する人も増えてきているようです。

増毛町の誇る、暑寒別岳を源とする清冽な水で仕込んだ、極上の発泡酒と純米大吟醸の味わい深さと柔らかな口当たりに、多くの参加者が魅了されました。また、和歌山県の南高梅を漬けた梅酒は、口の中にスッと広がり、北海道の広大な自然だけでなく、江戸時代から栄える増毛の歴史をも彷彿させ、その味わいに誰もが驚きを見せました。香港人インフルエンサーは、「本当に美味しい。何杯もお代わりしてしまう」と、終始笑顔を浮かべていました。香港向けに作られた日本酒が、国内で購入はできないことから、「日本で買えないのですか。残念です……。今すぐ国内でも販売してほしい！」という声が聞かれました。

国稀酒造四代目の林眞二代表取締役社長は、「香港と日本のコラボレーションから生まれた特別な日本酒を日本とは異なるシーンで、より多くの香港の方に楽しんでいただきたい」と特別な想いを語りました。

香港の消費者に、新たな魅力を持つ北海道の日本酒が紹介され、今後も香港でも多様な日本酒に触れる機会がますます増えていくことが期待されます。

香港市場向け新商品

宮城日本香港協会　事務局

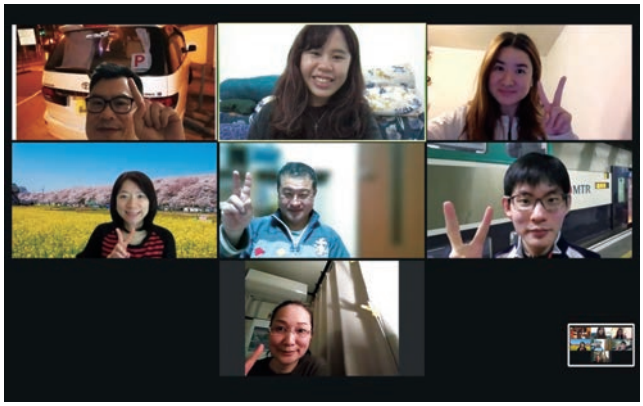
学生部発足から2年 オンライン交流会好評継続中

2020年3月、本協会にて新たに誕生した「学生部」は、香港からの留学生を含む県内の香港好きが集まって、新型コロナウイルス感染拡大下の現在はオンライン開催を中心に、毎月第1日曜日の夜に継続して交流活動を行っています。

昨年12月は、クリスマスをテーマに10名の参加者が集まりました。今回は日本で流行しているボードゲームを開催し、香港の方には日本（宮城県）で今流行っているものを景品に、日本の方には香港のお土産を景品に、ボードゲーム参加者の方々とプレゼント交換会を行いました。香港の参加者の方からも「美味しい宮城県の特産品を貰えて嬉しい」として、会は好評を博しました。今後も東北の特産品を、香港の皆さんに知って頂く機会を設けていきたいと思います。

2月の香港宮城交流会

今年1月は、「旧正月の準備」「地震への備え」といった、いくつかのテーマを題材に、香港人学生と日本人参加者が発表・ディスカッションを行いました。旧正月の話題では、香港では多くの場所にきんかんやみかんを飾る風習が紹介され、地震への備えについては、震災を体験した東北ならではの準備の秘訣が日本の参加者から披露されました。お互いにとって非常に新しい発見がありました。続く2月には、7名の参加者を得て、冬の過ごし方についてわいわいと話し合いました。交流会当日は、香港は旧正月が終わってしばらく経ったものの、「まだ友達や家族はお正月ムードだ」と話す香港の参加者もいましたが、日本では立春を迎えたものの、特に東北地方はまだまだ寒さが抜けきれない時期です。寒い日の過ごし方について、日本の参加者からは紹介がありました。3月に開催された交流会では、日本での卒業シーズンにちなんで、「卒業」というテーマでフリートークを行いました。香港の卒業式はアカデミックガウンを着るのが一般的だそうですが、日本では最近和装の良さが見直され、小学生の子どもたちも卒業式に袴を着るのが流行しています。



ZOOM会議後の記念撮影

学生部発足から約2年が経ちましたが、日本の参加者の皆さんからも「香港に直接行く機会が減ってしまった今、香港の皆さんと交流できる貴重な機会だ」といった声や、香港の参加者の皆さんからも「本当は直接日本に行きたいが、このように日本の皆さんと色々お話できてとても楽しい」といった声が寄せられました。今後も文化交流を通じて、宮城・日本と香港の絆を深められるよう事務局一同一層努力してまいりたいと思います。

学生部・青年部より広東語で新年のご挨拶

沖縄日本香港協会　事務局

春節・香港ビジネスセミナー2022 in 沖縄 ～香港・GBA（大湾区）の今を知る～ 開催

令和4年2月25日（金）、沖縄ハーバービューホテルにおいて、沖縄日本香港協会と香港貿易発展局の共催による「春節・香港ビジネスセミナー2022 in 沖縄」を開催しました。

今回の春節ビジネスセミナーでは、香港貿易発展局大阪事務所長リッキー・フォン氏をお招きし、香港が有する地理的優位性やビジネスを支える様々な機能、今後も発展するアジアのゲートウェイとしての重要性や、香港・マカオと広州をはじめとする広東省の主要9都市を一体的に整備し、新たなイノベーションやビジネスを創造する一大経済圏である「GBA（グレーター・ベイ・エリア）構想」についてご講演頂きました。その後、香港との貿易を促進・支援・発展させるための香港貿易発展局の取り組みを、香港貿易発展局大阪事務所次長田中洋三氏にご講演頂きました。セミナー終了後、参加者は名刺交換等を行い、香港に関するビジネスに関する情報交換が行われました。

沖縄フェア in 香港　7月開催決定

一般社団法人沖縄県貿易協会（沖縄県那覇市、会長新垣旬子）は、総合ディスカウントストア「ドン・キホーテ」を中心に国内外で店舗を展開する株式会社パン・パシフィック・インターナショナルホールディングス（以下PPIH）と連携し、海外事業を担うPan Pacific Retail Management（Hong Kong）Co.Ltd（以下PPRM）が香港で展開するDON DON DONKI 7店舗において、本年7月1日から「沖縄フェア in 香港」を開催する運びとなりました。

リッキー・フォン氏（春節セミナー）

「沖縄フェア in 香港」は、PPIHが2020年10月23日に設立したPan Pacific International Club（PPIHグループの海外店舗に対して輸出を希望する生産者や関連団体で構成する会員制組織）に当協会が同年12月に加盟し、当協会会員をはじめ県内の貿易に携わる事業者の海外展開の支援・強化を目的に展開する各種取り組みの一環に位置付けております。

PPIHおよびPPRMは、アジアにおいて2017年12月にオープンしたシンガポールを皮切りに、シンガポール（12店舗）、タイ（4店舗）、香港（9店舗）、マレーシア（2店舗）、台湾（2店舗）、マカオ（1店舗）に出店を果たし、米国も含めて世界95店舗を展開しています。とりわけアジアにおいても、マーケットからの強い支持を追い風に、わずか約4年間で30店舗まで急拡大しており、「沖縄フェア in 香港」の開催は、沖縄の地理的優位性も最大限に生かしながら、沖縄県が推進する国際物流拠点を活用したアジアをはじめとする海外市場のニーズに対応した県産品の販路拡大や県内企業の海外展開促進に資するものと考えています。

また、沖縄県はPPIHと県産品の海外販路拡大などで連携協定を結び、後押しします。沖縄県は、令和4年度から始まる次期沖縄振興計画で、2031年までに県産品輸出65億円を目標としており、その実現に向けた第一歩ととらえています。日本製品・産品はアジアでも人気が高く、沖縄産品の拡大により沖縄の観光地としての知名度の向上も期待できます。

新型コロナウイルス感染症の収束は、まだ充分に見えていませんが、沖縄と香港とのビジネスは、着実に展開されています。

春節セミナーの様子

HIROSHIMA

広島日本香港協会　事務局　西本 淳一

香港での個別マーケティング事業について

広島日本香港協会では、2022年2月24日と25日に香港PANDA HOTELで開催される株式会社JTB主催の商談会「Japanese Foods Premium Trade Fair」に参加する予定としておりましたが、香港でのコロナウイルスの感染状況が急拡大したことにより完全オンラインへ移行したため、出展を取り止めました。当協会ではこの商談会において、マーケティング調査を行うこととしておりましたが、完全オンラインとなったことにより、来場予定のバイヤーへの商品評価調査や購入可能性の聞き取り調査を行うことができなくなりました。

当事業の概要を説明させていただきますと、マーケティングブースを2ブース確保し、1ブースに県内企業5社の10商品を展示し、現地へ送ったサンプルをその場でバイヤーに試飲・試食（後に試飲・試食もコロナウイルスの影響により不可）していただき、アンケート評価を回収するというものでした。その後アンケート評価をもとに、バイヤーと県内企業のマッチングを行い、商談へと繋げる予定としておりました。

そこで本稿では、当事業に参加を予定されていた当協会会員4社7商品を紹介させていただきます。

◆ 会員紹介と商品案内

クニヒロ株式会社

生カキの販売を1957年に豊田郡安芸津町にて創業、1970年に國広水産株式会社を尾道市において設立されました。現在は生カキをはじめとする生鮮魚介類の加工販売、冷凍・冷蔵食品の製造販売を行っており、『あなたの食卓へおいしい食材を』を合言葉に、グローバルな視野で世界品質のおいしさに挑戦されています。

「Frozen Steamed Oyster Meat」は、和・洋・中と幅広い料理に利用いただけ、加熱しても身の縮みが少なく、存在感とジューシー感が際立ちます。また、「Smart Oyster FRESH」は、低温超高圧処理により熱がかからず、見た目は生に近い仕上がりで、安全安心に美味しく食べられます。

合名会社梅田酒造場

広島市東部に位置する安芸区船越の岩滝山の麓にある酒蔵で、1916年に創業されました。岩滝山から流れる伏流水を地下60メートルの深さから汲み上げた湧き水、広島県産の酒米「千本錦」、広島県で作られた吟醸酵母を使用するなど、地元広島にこだわったお酒を造られています。

英国の伝統的な酒類コンクールInternational Wine Challenge 2020年大会での「本洲一 無濾過純米吟醸」金賞受賞を始め、普段日本酒を飲み慣れていない方にも親しみやすいフルーティーで華やかな風味のお酒は、国際的な酒類品評会で多数の高評価を獲得されています。

オタフクソース株式会社

1922年に広島市横川町で、醤油類の卸と酒の小売業佐々木商店として創業されました。1975年に現社名に変更され、本年11月には100周年を迎えます。お多福グループは、理念である『健康と豊かさと和』を世界に広げるため、各地の特性に合う商品や豊かなメニュー提案を行っています。

「お好みソース300g」は、野菜・果実に約20種類の香辛料をブレンドしたまろやかなソースで、お好み焼やポテトなどに上掛けして召し上がれます。また、「お好み焼こだわりセット4人前」は、山芋入りお好み焼粉、天かす、すじ青のりをセットにした関西お好み焼が楽しめる材料セットです。

田中食品株式会社

1901年呉市で創業され、大正時代に日本ではじめてのふりかけ「旅行の友」を開発、販売いたしました。1951年に現社名に変更し、当社のふりかけは『子を想う親心が生んだ、愛情に満ちあふれた食品』として、本物の素材を使い、味付けには決して妥協せず、愛情と細心の注意をもって作り続けられています。

「無添加ふりかけ 海苔」は、素材を大切に着色料、保存料無添加で仕上げられ、厳選した海苔と香り高い黒ごまを使用し、香り良く食感の良い一品です。また、「ごはんにまぜて 6色の野菜」は、わかめベースに6色の野菜を使用し、無着色料で彩り鮮やかな優しい味のふりかけです。

今回の香港での個別マーケティング事業は、残念ながら出展取り止めとなってしまいましたが、これからも会員企業の香港への事業展開を支援して参りたいと考えております。

（上から時計回りに）クニヒロのオイスター製品、梅田酒造場「本洲一」、オタフクソース「お好みソース」、田中食品「無添加ふりかけ 海苔」

新潟日本香港協会　会長　吉田 至夫（株式会社新潟クボタ代表取締役社長）

香港とお米輸出

日本香港協会機関紙『飛龍』発刊100号記念、誠におめでとうございます。

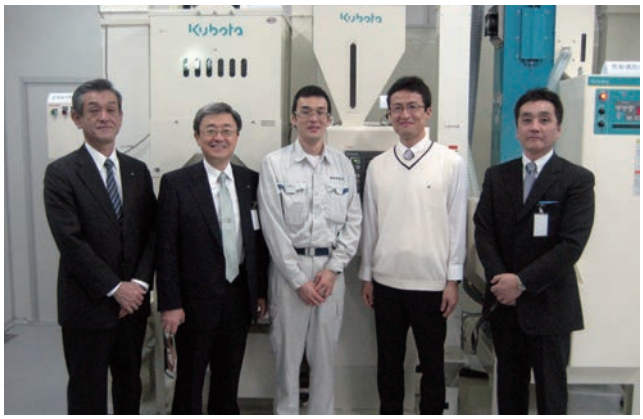
実は私、香港については新参者であります。新潟日本香港協会会長を拝命してはおりますが、人生初めての香港は2012年12月。飛龍をみていますと、若い頃に銀行や商社での香港支店勤務や、親御さんの仕事の関係で香港日本人学校などを経験されておられる方が多く、ある意味うらやましい限りでした。

◆ クボタのお米輸出プロジェクト

私と香港との関わりは全て、クボタグループで始めた日本米の輸出事業に始まります。話は2011年の1月。クボタグループの新春全国会議でクボタの益本社長（当時）から、「クボタでお米を輸出して、日本農業に貢献したいのだが吉田さん手伝ってくれないか。聞くと、クボタの販売会社でお米を取り扱っている会社は吉田さんの新潟クボタだけだそうだね」と相談を受けました。

私も日本農業の抱える閉塞感を打開するには、お米の輸出など思い切ったことに踏み出さねばという思いがありましたので、ふたつ返事で「ぜひ協力させてください」とお答えしました。その年は3月に東日本大震災・福島第一原発事故が発生するなど、いくつかの困難もありましたが、農家の有志のご協力を得てこのプロジェクトはスタートしていきました。思い出すのは、本格的に輸出が始まった2012年12月。協力していただいた農家さんとともに参加した久保田米業香港の開所式です。式典、祝賀会そして微醺を帯びながら眺めたビクトリアピークからの100万ドルの夜景。以来私の年越しは香港の夜景抜きには語れなくなったのであります。

2013年3月設立された新潟日本香港協会の会長に就任以来、多くの知遇を得て、わが社の経営戦略も大きく変わりましたし、私自身の人生も変化しました。お米輸出に関しては、親会社のクボタは同年7月にシンガポールにも会社を設立、12月には新潟クボタとして合弁でモンゴル・ウランバートルにお米の輸入精米販売会社MJAを設立しました。



久保田米業（香港）の精米機の前で。真中の谷口君（当社社員）が3ヵ月香港に居住して香港社員に精米技術を伝授

これに伴い新潟クボタの新潟県産米のお米輸出は2012年の369トンから3,000トンレベルに拡大。日本全体のお米輸出も2012年の2,202トンから2021年には2万2,833トンにまで拡大することができました。そのうち常に輸出米の半分の市場を占めているのが香港です。最近日本の農林水産物・食料品の輸出拡大が叫ばれていますが、実績を見ると2012年の4,497億円から2021年には1兆2,385億円と目標の1兆を超え、ここでも香港はけん引役として活躍しています。

私事になりますが、私は還暦近くまで、新潟県で農機具販売を生業としてきました。超ローカルです。若き頃青雲の志を抱いて早稲田大学で学び、世界に雄飛せんと日本経済新聞に進んだのですが、故あって父にひき戻され現職にいるわけです。佐渡の営業所長も経験し俺の海外は佐渡だったかと思ったこともありました。それが香港との出会いで一変いたしました。コロナ前は年に10回近くは香港や東南アジア諸国、北米、オセアニア、ロシア沿海州など市場開拓に飛び回り、やはり思いは叶う時もあるのだなと思う次第です。

地方創生という言葉があります。最近選挙以外ではめったに聞くことがなくなりましたが、私は地方創生とは地方の中小企業が直接海外と結びつくことだと思っています。輸出入でも現地生産でも何でも良い、人口減の内需にしがみつかないことです。一度経験してみると目からうろこが落ちるとはこのことかと思うことがたくさんあります。私は、このような経験や出会いの場を提供できる新潟日本香港協会でありたいと願っています。

久保田米業（香港）の開所式に参加して頂いた新潟県内の農家の皆さんと記念写真。この農家さん達が新潟県のみならず日本のおコメ輸出をけん引してくれた

高知日本香港協会　事務局長　横山 公大

駱駝式香港火鍋を開発

様々な世界情勢で揺れながらも無事に閉幕した北京2022冬季オリンピック、パラリンピック。日本選手団の活躍も目覚ましく、過去最多のメダル獲得となり、期間中は日本でも大きな声援が飛び交っていました。コロナ禍ではありますが、ビッグイベントの在り方は、これからの新しい取り組みの参考にもなり、勇気と希望を感じる意義のある大会になったと思っております。選手団、また関係者のご活躍に改めて敬意を表します。

まだまだ終息の気配を見せない新型コロナウイルス感染症の影響は、当協会員の多くが従事する飲食業界に依然として大きなダメージを与えています。2022年を迎え、新年会や春節セミナーなど、各種会合も現段階では全てが中止、延期となっており、厳しい時期が今なお続いており悔しい思いをしておりますが、それでも前を見据え前進していく所存です。また、今年は香港特別行政区設立25周年という記念すべき節目の年を迎えられるということで、国内外問わず周年事業で大いに盛り上がることを期待しており、高知協会においても関係する方々をお招きして、盛大にお祝いをしたいと考えております。改めまして心よりお祝いを申し上げ、今後ますますの発展を祈念いたします。

さて前号では高知協会、松田高政副会長の6次産業化プロデューサーとしての活躍に触れましたが、本号では、高知協会理事兼、会員拡大委員長を務めていただいている、仲井邦宏さん（ダイニングプランナー㈱代表取締役社長）の取り組みをご紹介いたします。

駱駝オーナー・仲井邦宏さん

仲井理事は、高知市内で現在3店舗の飲食店を経営している高知の経済界でも有名な若手経営者のおひとりです。社会人になってからは、肉体労働や携帯の営業職など、様々な職で経験を積み、34歳で独立。高知の繁華街から少し入り込んだ場所に《おびや町小路》という何とも雰囲気のいい人気の路地があるのですが、その路地には数件の小さな飲食店が軒を並べており、2008年、その一角に「居酒屋駱駝」をオープンさせます。営業職で培った類まれな接待のスキルと、高知にはない斬新なメニューやアイデアを活かし、お店は大繁盛。路地の中でお店の規模を徐々に拡大しながら、現在は路地にある駱駝本店をはじめ、路地に隣接する大手ホテルの1階に、写真にもある駱駝別邸をオープン。一昨年には高知駅横のこれまた大手ホテルチェーンのレストランにエキマエノ駱駝をオープン。エキマエノ駱駝の朝食は圧倒的なボリュームとコストパフォーマンスが人気を博しています。

地元でも大人気！駱駝のエントランス

駱駝本店、別邸で人気の藁焼きカツオのタタキは、その提供方法が斬新で、観光客にも大変喜ばれており、まさにインスタ映え！写真では伝わらない満足度なので是非一度足を運んでください。そんなこんなで高知の街を賑わしてきた仲井社長ですが、縁あって数年前から高知日本香港協会に入会いただきました。その後、当協会が主催する香港セミナーや、香港ビジネスツアーに積極的に参加をされ、元々目指されていた海外ビジネスへの意欲も増し、ついには香港ツアーでヒントを得た、駱駝式香港火鍋を開発。冬場の人気メニューとなっています。写真はその後開発された土佐ジンジャー鍋ですが、これも香港協会の仲間と共に高知の新名物として開発されました。そして波乱万丈の経営の中、迎えた新型コロナウイルスの波。来店客は激減でもお店を継続させ、雇用を継続させながら、新しい商品開発にも精を出されています。その中でも筆者がイチオシなのが、「駱駝特性だし醤油」！

藁焼きカツオのタタキは提供の演出も魅力

土佐ジンジャー鍋

TKG（たまごかけご飯）によし、冷奴や湯豆腐によし、うどん等のだしにも使える優れもの。高知にお越しの際にはぜひ駱駝に足を運んでいただき、通販でも是非検索してみてください♪　そして仲井社長の接待を受けることをオススメいたします、これまた虜になりますよ！

駱駝特製だし醤油

皆さまにとって、新年度がより良い一年となりますことを心からお祈りしております。

飛　龍

URL　http://www.jhks.gr.jp

日本香港協会全国連合会　電話（03）5210-5901
〒102-0083　千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

NPO法人日本香港協会（東京）　電話（03）5210-5870
〒102-0083　千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

関西日本香港協会　電話（06）4705-7030
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内

中京日本香港協会　電話（06）4705-7030
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内

九州日本香港協会　電話（092）260-3748
〒810-8629　福岡市博多区中洲2丁目6-10　株式会社ふくや内

山形日本香港協会　電話（023）665-1310
〒990-2301　山形市蔵王温泉丈二田752-2
ユニテ蔵王ジョーニダ・リゾート内

北海道日本香港協会　電話（011）261-4288
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-7　北洋銀行国際部内

宮城日本香港協会　電話（022）226-7025
〒980-0014　仙台市青葉区本町1-2-5　第三志ら梅ビル2階西
（株）Sola.com 内

沖縄日本香港協会　電話（098）8686-3758
〒900-0033　那覇市久米2-2-10　那覇商工会議所内

広島日本香港協会　電話（082）248-1400
〒730-0052　広島市中区千田町3-7-47　広島県情報プラザ3階
（公財）ひろしま産業振興機構　国際ビジネス支援センター内

新潟日本香港協会　電話（025）365-0001
〒951-8065　新潟市中央区東堀通一番町494-3　2階　愛宕商事株式会社内

高知日本香港協会　電話（088）855-9570
〒780-0056　高知市北本町4-4-7　パールマンション1301
株式会社オルトル内

東京にいながら
香港本場の味をお楽しみ頂けます

香港の名店「喜記」の日本一号店。
避風塘料理を中心に焼物・点心・海鮮・麺飯・デザートまで
香港の名物料理を幅広くご用意しております。
本場で修業した熟練のシェフがお作りする料理を
ぜひ心ゆくまでご堪能ください。

喜記
HEIGEI

〒104-0061 東京都中央区銀座5－7－10EXITMELSA 7F
東京メトロ銀座駅A2出口より徒歩2分・JR有楽町駅より徒歩7分

平日　【LUNCH】 11:30～15:00（LO 14:30）
　　【DINNER】 17:30～22:00（LO 21:30）
土日祝　11:30～21:00（LO 20:30）※17:30よりディナー対応
定休日 年中無休

HP

ご予約・お問合せ 050-3173-1505

Coupon
ディナーコースを15%割引

・2名様以上のご利用が対象です。
・ご注文の際に本冊子をご呈示ください。
・有効期限　2022.8.31